

- 凡例
1. 資料名冒頭の★は個人蔵、◎は小田原市立図書館蔵であることを示す。
  2. 翻刻にあたり、常用漢字等に改めた箇所がある。
  3. 行替等は原資料に拠った。
  4. □は判読困難を示す。
  5. 井上康文発書簡の内、井上以外の人物による書き込みはゴシック体とした。
  6. 翻刻は、小田原市立図書館学芸員・鈴木一史及び同館・星野和子が行った。

◎西條八十書簡（井上康文宛） 大正二五年（一九二六）六月二六日

拝啓。

御高著「華麗な十字街」をわざわざ小生にまでお恵み下さいます、有難う存じました。あつく御礼申上ます。

内容はこれからゆつくり拝論したいと存じますが、青少年ならばいざ知らず、かなり衣食住の生活に圧せられがちの私たち仲間にて、かうしたナイーヴな□牲的な御仕事をなさる兄をまづ、しみぐ敬愛したい心もちになりました。省みて自身が恥かしくなります。

右とりあへず御礼まで。 かしこ。

廿六日

西条 八十

井上康文様

★前田夕暮葉書（井上康文宛） 大正二五年（一九二六）七月二日

拝啓先日散文詩集・華麗なる十字街をいただき有難く御礼申し上げます小生山に参りをり不在無礼いたしました散文詩を君は大分前から書いてをられることを本書に於てはじめて知ったわけで申し訳ありません。小生にとって一つの驚異です烟れる田園を近々さしあげたくおもひます 先は大おくれながら御礼まで

◎井上康文書簡(南江二郎宛)

大正一五年(一九二六)六月一日

先日は失礼しました。  
帰へってから消息がないので、  
さぞ忙しい事と思ひます。  
散文詩集もおかげで漸く  
十四日に出来上る事となりま  
した。もう凡て私の手を離れて  
十五日に発送すればいい事に  
なりました。いろんな苦勞をして  
やっぱり不成功でした。  
ただ自分のものをこうして苦しんで  
こしらへた喜びはあるけれど、  
人はそれを買つてはくれまいと思ふ。  
でも思はぬ人達の厚意でもあ  
れ百二三十人もありました。が結局  
百円位たしまへです。  
思ふやうにゆかぬものです。  
それから貴兄の方でとって下さ  
る三部かの代金どうか兄から  
立てかへてをいて下さいませんか、  
寄贈や読者に郵送するのに

◎井上康文書簡(南江二郎宛)

大正一五年(一九二六)八月六日

ずいぶんごぶさたいたしてをりました。  
手紙をかこうと思ひながら、つひ失礼  
してみました。  
何んといつても東京はいま一番い  
やなどころです。君のやうに自分の家  
でしたい三味は羨やましい限りです、  
子供と妻を田舎の方へやって、相変  
らず一人でぼそぐとしてみます、  
明日は「主観」の編輯は、何れもよく  
ないことばかり  
今年はまだみてみます、ほんとに  
やりきれない。いつも夏は元氣です  
が、やっぱり年をとったせいでせう、と  
云つて年のことを云ふ年でもないでせ  
うが、やっぱりといふ気がします、  
意地にも弱音を出したくないんですが、  
海が恋しい、海が  
空の海心ばかり泳ぐ暑さかな、

一寸かゝるので、申込者からは郵税  
がとつてあるのですが、それもいろんなも  
のに払つてしまつたわけです、  
貴兄の方に送る分は差しあげ  
るのがほんとですが、こっちが苦しい  
ので売れるといふ分だけでも送つて  
下さい。十五日に兄の分まで六部  
送ります。内外山君のだけは名簿  
に加へてをきました。  
忙しいでせうが、僕の方へあてて  
至急お送り下さる様相願ひ申上ま  
す。

展覧会の方は会場がまだ決定  
しません、松坂屋は売り出しで  
ことはられました。

何れこの方は後便にて  
六月十一日夜 では何分どうぞ

南江兄 侍史

康文

くるわの裏町の二階から  
物干に乳房を見せた五六人

夕方になると、向ふの物干に全裸の女  
たちが、空気を吸ひにやってきます、  
散文詩集さっぱりいけないでせめられて  
みます。暑いのにその心配も一通りでは  
ありません。

少しあはないと話もあります、  
大阪の野球がはじまるといふのに、  
出られないのも残念、詩集でいい夏  
を送らうと思つた虫のよさがこはされ  
ました。

あなたのよき兄弟によるしく  
ではまた

八月六日

康文

二郎大兄

侍史

御手紙拝見しました、「詩集」も諸君の甚大な尽力で益々よくなつてゆくので嬉しく思つてゐます、昨日も尾崎と中西と三人で一日武蔵野を散歩しながら雑誌のことや詩のことを話しあひました。新年号以後はもっといいものになる事と思ひます。

「独白」についてゆっくり書きたいと思つてゐましたが、つひいままで失礼してゐました、こうした短い詩型を撰んで試作をした心持はよくわかります、作品として、深刻であり、苦心してゐる点がはつきりわかります。ただ短歌の形式を踏襲した点、それがいけないのではないけれど、形式を破つてゐながらもやはり外形律としての三十一文字(短歌調)がついてゐるので、何んとはなしに、軽い感じがします、これは私一人の感じてあるでせうし、外形律が少しも悪いといふのではなく、短歌調が悪くはないのですが、や、遊戯的な感じがあるやうに思はれます。

石田などのあの俳句的詩がいまひどく詩壇に悪い影響を與へ、そこになんら生命力を感じないといふ点で問題になりませんが、あ、いった詩の(短章の)もつてゐる単調味を「悲憤独白」がもつてゐないことは喜ぶべきことであります。彼等の詩には少くとも生活がない、人間の心の動きがない、自然に対して静かに埋もれてゆくものしかない、それではいけないと思ひます。少々のが外れましたが、つまりそういつたものを今後においても警戒すべきであると思ひます、

「悲憤独白」はもっとぐんぐん突きいった生命力を感じさせるやうなものになつてゆくことを望みます。毎号のせることは少しもかまひません、一冊にまとめて、世に問ふのいいと思ひます、ただ一冊は雑誌につづけてのせてゆくと、それっきりのものしかしてゐないやうに思はれるでせうし、単調になるかとも思はれます、君がいま外の雑誌には多く評論を書いてゐるのでよけいにさう思はれはしないかとけねんします、

尾崎 中西 陶山 勝 みんなおきになつて「詩集」に書くとき意気こんでゐます、その中であつて「悲憤独白」をつづけてゆくと、君の気持を理解せずに簡単に片づけさうに思はれます、(長いものを力作と認める今日に於いて)然し僕としては喜んでのせます、あなたの考へにまかせます、

九十頁位の気持のいいパンフレットにして出すのもいいと思ひます、そつちでは印刷もキレイ故やりよいでせう。

新年号の原稿至急お送り下さい。

京都詩集はまだですか、ではまた

十一月二十九日

井上康文

南江兄

◎井上康文書簡（南江二郎宛） 昭和九年（一九三四）十一月五日

謹啓

その後は御無沙汰いたしました、お変わりもありませんか、過日の大風のときは別にお障りはなかつたのでせうか、お見舞もせず失礼しました、たぶん大丈夫だと思つたので。それについてのいろいろな障りはあつた事と思ひますが、それにはわれわれのやうに驚く必要のないことを知つてゐたからでもあります。

突然ですが、暫くぶりで、旅に出たいと思つて、一人で勝手なプランを立てました、旅に出ると云つても何のあてもなしに出ることも出来ないの、君に相談をすることに決めて次のやうなプランを立てたのです。それについて君の御尽力をお願ひします、君が幸に放送局にゐるので、今度は僕の方からお願ひします。

都合で十九日頃東京を立つことからはじまります、で大阪で、二十日頃に放送したいのです。二十日（或は十九日でも）から二十三日頃までの間に放送出来るやう御配慮御尽力下さいませんか、二十四日頃に広島で放送するやうに云つてありますので、二十二日か一日か、二十日か十九日のうちなら非常に都合なのです、いろいろプログラム御予定もあることと思ひますが、昼でも夜でもの何れかの時間をぜひ作つて

頂けるやうお話し下さい。お願ひします、話は次のやうなもののうちから御選びください、

A、現代詩の諸相

B、生活に於ける詩の位置

C、女性と詩と詩人 | 二十二日午後六、二五〇  
一タ一話

突然に勝手なこと頼んで御迷惑かも知れませんが、何卒よろしくお願ひします、大阪ではこれで三回目です。先日多田君にたのんで、こちらでやりました。話にならない困りかたで、旅にでも出なければ救はれないのです。では不要用のみ

井上康文

十一月三日

南江二郎詩兄

冠省

病気で御入院なすつたとの事、少しも存じません  
で御見舞も申し上げず失礼しました。

手紙の返事が少し長かつたので、風邪でもひか  
れて休んでゐるのではないかと思つてはみました  
が。もうすつかりいいのですか、るいれきとは又  
どうしたことでせう。私も一月半頃から少し身  
体の具合悪く、未だになやんでゐます。

どうぞ後々御身体をお大切になさい。

放送のこと、御手数かけてすみません、御話は

よくわかりました。重ねて御迷惑をおかけ

致しますが、四月の廿八日頃所用あつてぜひ

大阪へ出なければならぬのですが、二十九日か三

十日頃、昼でもいつの時間でも結構です。

ローカルとして時間をおとり下されば幸甚です。

文藝講演或は趣味講演で結構です、

いま自分のもつてゐるプランとしては

A、山岳文学論(或は山と文学)

(主として富田碎花などの山の話について。)

登山熱、ハイキング熱が盛んですし、そろそろ

山の登山シーズンに入りますので。

B、日本詩壇の現状

日本詩壇の現状を論じ、自由詩の進展  
性についての一私見、これは現在の詩人の  
大きな問題なので。内容と形式について。

C、詩の実用と朗読讚美

詩がいかに生活の上に実用化されてゐる  
か、軍歌、校歌等の実例と、朗読の一般  
化が生活に及ぼす好影響の実例。

右のうち何卒御撰定下さいませんか。

度々御迷惑をお願いしますが、何卒よろしく

お願い致します。

「日本詩」は近日書店に行つてとりよせお送りい  
たします。いろんな問題があつて、大木が編輯  
することになりました。貴兄のことは前の編輯  
のときに話してあります。いつでも書けますから  
どうぞ新作をよせてやつて下さい。

では右要用まで。

いま福田君が生活上にひどくまいつてゐます、このこと  
について又何れくはしくお話しいたします。

三月廿四日

南江二郎詩兄

侍史

井上康文

◎井上康文書簡(南江二郎宛) (年不明) 一〇月二日

冠省

先日は失礼しました、毎日御多忙の事と存じます。尾崎君のと、前田君の朗読ききました。僕の作品も二篇翼賛会の方へ出しておきました、どうぞよろしく。もしプログラムの都合がいたら、二十七日か八日頃朗読をしたく思ふのですが、如何でせうか、貴意を得たく思ひます。放送局の方に作詩の仕事あつたら書かして頂き度いとも思つてみます。いろいろ話したいが。又そのうち

南江兄

井上康文

★恩地孝四郎葉書(井上康文宛) 昭和一六年(一九四二) 六月一九日

詩本御恵与、ありがたく拝受  
仕りました、美しい本、かねておよろこびも申上ます。  
いづれに(ママ)おちつひて拝見させて  
頂きます、とりあえず拝受  
御礼まで

草々

恩地孝

◎井上康文書簡(南江二郎宛) 昭和一七年(一九四二) 四月二六日

四月廿六日、

ラバウルにて

南江兄

井上康文

謹啓その後お変わりありませんか、あれからすぐ立つことになり、風邪の熱で立つ日まで苦しんでみましたので、とうとう原稿書けずに失礼してしまひました、日本を出てから一ヶ月余、ラバウルからラエ、サラモアにゆき、昨日飛行機でサラモアから再びこのラバウルに帰へつてきました。第一線で、いろいろこれまでによいものを見、体験しました、貴兄の愆しい土人の面やいろんなものがありました、持ちかへることが出来ませんで残念です、カナカの島民、パプア族などいろんな人間を見ました、濠州の飛行士も捕虜になつて逢ひました、随分苦しい危ない仕事にやつてきたものです。いい作品をこれからうんと書いてゆきます。もう二三日すると次のところに行くので、当分又手紙も書けませんただ元気でやつてみます、貴兄もお体をお大切に、いい仕事をして下さい。では又

◎井上康文書簡（南江二郎宛） 昭和一七年（一九四二）七月二十九日

御手紙ありがとうございます、御病気の由  
お案じいたしてをります、  
今月中旬無事任務を果して帰還い  
たしました、すぐ御挨拶に上るべきでした  
が、社の講演や郷里の方の講演や新聞の  
続きものの原稿に追はれて遂に今日にな  
つて貴兄から御手紙を頂くやうなことにな  
つてしまひまして誠に申わけありません、実は  
少しばかり実に変なものです、島民のも  
のを持つてきましたので、お土産をもつて参上し  
やうと思つてみたところお手紙でした、いろいろ  
お話もあり、近日持参します 大森の方へ朝  
おたづねします、御明眉の上草々

南江兄

七月廿九日

康文

◎井上康文書簡（南江二郎宛） （年不明）一月四日

冠省  
意義深き新春を迎へて  
御同慶に存じます  
貴兄の御意気ごみ非常に  
力強く嬉しく思ひました、ただ  
詩を書いてゐるだけが、それが何の  
熱情もなくただ職業的に、或は  
単なる自己宣伝のために詩を  
書いてゐる小児病的な詩人の  
多い現在貴兄のその心構へ  
と詩人としての態度を力強く  
思ひます、私も「尊き自爆」  
「日本の空」を書いてから非常に  
詩作が出来 これを機会に  
大いに詩を書く自信と決心と  
をもちました、これまで詩を書かず  
にゐたのは生活上の仕事のため  
もあります、一つには発表の  
機関のないのと、一つにはあまりに  
小さい詩人たちの多いのにや、相  
憎をつかしてゐたからです  
今後は又二十年の昔のやうに  
お互ひに力を併せてやりませう  
事ある事に私は貴兄を支援  
します、

最近の三篇の作のうち二篇を  
翼賛会の方へやつておきました、こ  
の記事も大いにつづけてゆきたく  
思ひます、力のないものは途中で  
書き得なくなるでせう われわれは  
なほ大いに書き得る力をもつてゐ  
ます そのうちいい詩集を出す事  
も（十人位の作を集めて）計画す  
るつもりです その時には御相談し  
ます 何れお暇を見て話させよう  
一月四日  
二郎詩兄  
康文

尚稿料の件 貴兄のは  
特別です。外の人は全部  
更にこの半額です、これは  
現在やむない事情があるの  
です。あとで又話します、  
明日尾崎君のを頂くつもりです、  
その次に高村さんののも貰ひたいと  
思つてゐます、この事も少し計画  
的にやるとよかつたと思ひます  
何れ

なるべく、火、水、木のうちの午後から打ち合せ会をやりたい。今度の十八日は用事があるが、その前に一度やりたい。印刷は至急たのみます、

石は福田君が根府川石が非常に好きだつたようで、一間半位の大きな石を使いたい。

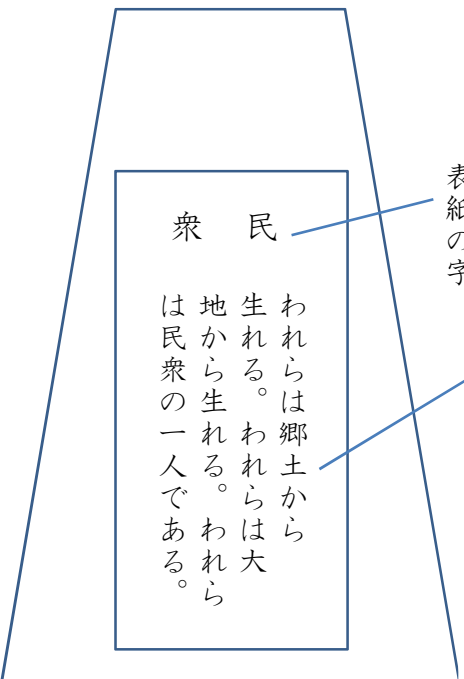
石橋村に  
米山菊太郎  
中島芳太郎  
という人がいるからこの二人に石のあつせん方をたのまれたし。

今日福田夫人を訪問よく話しました。別紙原稿用紙四枚を印刷にして頂き度、賛助員に外に入れる人があつたら入れて下さい。発起人等もよろしく。

市から有志から寄附を頂き、大体十万円位こしらえたい。こちらから画帖をもつてゆくからそれに市長から署名金額を入れてそれを廻したい。六月廿六日は朝十時除幕式、十一時墓参、二時頃から公民館で報告会、福田正夫追悼会をやりたい。市長、石井館長、それから発起人などで思い出を語りたい。福田作品の朗読などもやりたい。

発起人賛助になつて貰う人に至急話をつけて貰いたし。

表紙の字



民衆碑建設趣意書

“われらは郷土から生れる”と叫んで小田原で創刊された「民衆」は、日本詩壇に不滅の足跡を遺した。福田正夫氏らによつて成された民主詩運動は当時の詩界に新風を興し、今日の自由詩への発展の根源となった。敗戦後の日本は民主主義国家として再建にあつたつてゐるが、大正七年既に小田原の若い詩人たちは自由と愛と平等の精神をもつて、民主詩運動にその情熱を傾けた。時移つてここに四十年、われらの郷土に「民衆碑」を建ててこの業績を永久に記念したいと思ひ立つた。われわれの意をくんで、御賛同御支援を賜らんことを切にお希いする。

昭和三十三年三月 「民衆詩」建設発起委員



津由光造  
川崎長太郎  
瀬戸十弥  
堀川才次  
島本恒  
望隆  
立木卅末  
志澤正躬  
加藤茂雄  
井上康文

賛助

小田原市長 鈴木十郎  
小田原教育課長 関野惣兵衛  
小田原観光会長  
小田原図書館長 石井富之助

企画

- 一、昭和三十三年六月廿六日 福田正夫氏の七周忌にあたる日に除幕式を行う。
- 一、同日 公民館に於いて、建碑報告、福田正夫追悼会等を開く。
- 一、一口百円にて御寄附をあうぎたし。

附記

「民衆」は大正七年一月創刊、大正十年一月同人の小説号を出して終る。全十六号。この間同人として加わったものは福田正夫、牧雅雄、花岡謙二、井上康文、桑原国治、斎藤重夫、瀬戸一弥、渡辺順三、田熊保行、小栗又一、宮代直吉、津田光造、川崎長太郎、松田不久二、岡本秀夫、等である。

◎井上淑子葉書（中嶋美鈴宛） 昭和四七年（一九七二）一〇月二三日

今日は大変失礼をいたし、申しわけありませんでした。前々からの約束で、どうしてもでけなければなりませんんで、朝早くから留守をいたしました。主人は、土、日、祝日が忙しくて、夕方迄かえりません。まことに因果な仕事にありついたものです。老境が心細くて、かた時私も私をはなしませんため、私の用件で私がでかける時季がなく、籠の鳥でございます。よんどころない時だけ、土、日を選んで外出いたします。本日も学校時代の友達と会食して、私だけ三時に早退してかえりました。遠方をおこし頂いて、何とも相すまなく、その上お心こもるお土産を頂いて、おわびのしようもありません。どうぞお許し下さいまし。主人の健康はまずくですけれども、気弱になりました、私をうんざりさせます。秋空をみ上げて、私は、山あるきに心にこがすのですが、実行困難。この次は在宅しておまわいたしますから、またおこし下さいまし。百合の花は夏の日、久しく楽しませていたゞきました。来年もまたさいてほしいと、かあいがつております。